

藤原宮第19-2次の調査

(昭和51年10月～昭和51年11月)

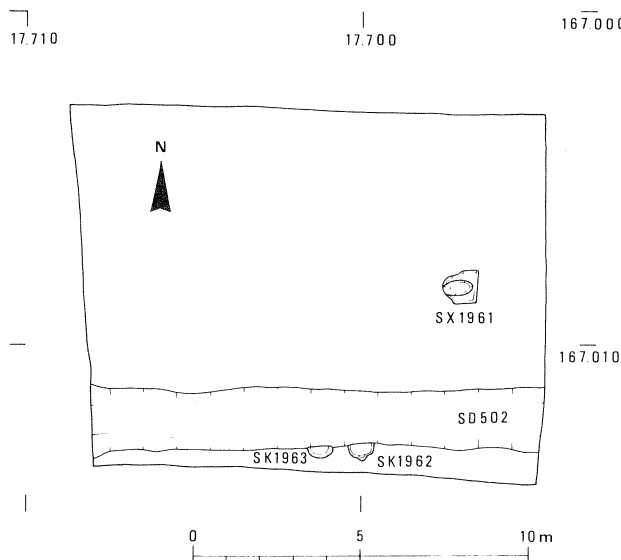
この調査は樫原市の農業用倉庫建設に伴う事前調査である。調査地は藤原宮の推定南面西門の北西にあたり、内濠の存在が予想される位置に東西15m、南北13mのトレンチを設定した(3頁の図参照)。

検出した主な遺構には藤原宮期の宮南面内濠SD502と、その北で検出した柱穴SX1961がある。それ以降の遺構として内濠SD502の南岸で検出した2つの小土壙SK1962、1963がある。

〔遺構〕 内濠SD502は幅2.1～2.6m、深さ1mの断面逆台形を呈する素掘りの溝である。堆積層は3層からなり、上層からは軒瓦を含む多量の瓦類が、また、中・下層からは木器・木簡を含む木屑が多量に出土した。柱穴SX1961は1.1m×0.7mの長方形を呈し、西に抜取穴がある。ただし、これに対応する柱穴は調査区内では検出できなかった。土壙SK1962、1963はいずれも内濠SD

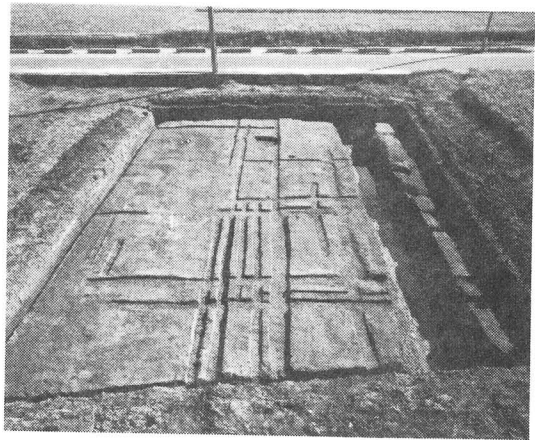
502より新しく、径0.8mの不整円形を呈する。埋土には藤原宮期の瓦を含む。このうちSK1963は深さ1mに達し、底部から完形軒平瓦1点が出土した。

〔遺物〕 今回の調査で出土した遺物は、藤原宮期の土器・瓦・木簡等で、この外に少量の弥生式土器がある。藤原宮期の土器には須恵器・土師



第19-2次調査遺構実測図

器があり、内濠SD502等から少量出土した。須恵器は杯・蓋・甕・壺等があり、土師器には杯・埴・甕等がある。瓦類は主に内濠SD502の上層から出土し、整理箱にして30箱程ある。丸瓦と平瓦が大半を占めるが、ほかに軒丸瓦3点、軒平瓦23点、面戸瓦5点と、熨斗瓦、隅平瓦等が少量ある。なお、このうち軒平瓦6646



調査地全景（西から）

Gは新出の型式である。また、丸瓦凹面に線刻した文字瓦が1点あり、「寺」「来」「文」等が判読できる。

木簡はSD502の中層を中心に約55点が出土した。大半は削り屑であるが、原形をとどめ釈読できるものは次のとおりである。

1. （表） 「 且鮭者速欲等云□□ 」
（裏） 「 以上博士御前白 宮守官 」
2. （表） 「 □進乎 」 （裏） 「 月廿□□ 」
3. 「 時_尔和 」 4. 「 新大ア十口 」
5. 「 □□□□自女卅 舟木若子女_{卅五}□槐 」
□□
6. 「 □主高階□ 」 （削り屑）
7. 首
（表） 「 依寺 」
□
（裏） 「 _有増_有 」
□
8. 「 □□□相女□□□ □□ 」

内濠SD502は藤原宮第1次調査で検出しており、南面中門心より280m西での今回の調査結果と合わせると、宮南面内濠は第6座標系の方眼西に対し南へ44' 12" 振れていることが明らかになった。これに対し、宮中軸線は真北に対し西へ26' 30" 振れることが判明しており、宮南辺は正しく直交しないと考えられる。